

# 「動かす」ことによって子どもの主体性を導き出す教育

## - 幼保一元化施設「きっずこくらみなみ」の現場より -

宮野真実

北九州市立大学文学部人間関係学科

### 要旨

本論文の調査は、福岡県北九州市小倉南区にある幼保一元化施設「きっずこくらみなみ」でおこなわれた。「きっず」は北九州市ではじめて幼保一元化制度を取り入れた施設として2004年4月に開設され、現在も保育や教育が続けられている。筆者もその中に参加し保育士の補助として関わりながら、子どもたちの様子を観察した。子どもたちを見ていると、明確な目的を持たないまま、単に走り回ったり、飛び跳ねたり、大きな声を出すなど、エネルギーを無駄に消費しているような、無目的な動きも多いように感じた。しかし、子どもたちにとって、動くことは欲求であり、動くことが彼らの成長にとってとても重要なのである。その動きから導き出される遊びによって、人間関係のルール、社会性を学ぶ。そのことで、嬉しさ、楽しさ、悲しさなど、さまざまな感情を体験する。そうして、子どもたちは成長していくのである。しかし、子どもたちに、遊具やおもちゃなどの環境を与えるだけで子どもたちを遊ばせておくのでは本当の子どもたちの成長にはつながらない。子どもの成長には、大人の介入が必要なのである。教師が間接的や直接的に関わることによって、自分たちだけでは経験できないような環境、遊びを体験することができる。遊びの幅も広がり、新たな楽しみを見つけることもできる。そして、教師と遊びの世界を共有することで、自己の世界を広げることができるのだ。そのような、大人の介入により、子どもたちの自発的な動きや、遊びを引き出すことを本論文では「動かす」という言葉を用いている。

きっずこくらみなみには、子どもたちを動かすしかけがたくさんあり、その「動かす」ということを実践している。「動かす」ことによって、子どもたちは身体的に動き、そのことによって精神的にも成長し、子どもたちの遊びはより主体的な充実するものになっていくのである。

### 目次

はじめに

#### 第1章 調査地の概要と調査方法

- 1-1 幼保一元化施設
- 1-2 きっずこくらみなみ
- 1-3 教師
- 1-4 調査方法

#### 第2章 動き、動かされるとは

- 2-1 「動く」
- 2-2 「動かす」

#### 第3章 「動かす」ための仕掛け

- 3-1 自然が子どもを動かす
- 3-2 子どもが子どもを動かす
- 3-3 モノが子どもを動かす
- 3-4 大人が子どもを動かす
- 3-5 物語が子どもを動かす

#### 第4章 考察

#### 第5章 結論

はじめに

「きっずこくらみなみ」は福岡県北九州市小倉南区にある幼保一元化施設である。北九州市で初めて幼保一元化制度を取り入れた施設として2004年4月に開設され、現在も保育や教育が続けられている。きっずこくらみなみには現在、常勤と非常勤をあわせ15人前後の教員が子どもたちの保育・教育にあたっている。筆者もその中に参加し保育

士の補助として関わりながら、子どもたちの様子を観察した。子どもたちを見ていると、明確な目的を持たないまま、単に走り回ったり、飛び跳ねたり、大きな声を出すなど、エネルギーを無駄に浪費しているような、無目的な動きも多いように感じた。子どもたちにとってそのような動きは生活の大半を占めているようであり、普段わたし達が「遊び」とよび得るような活動もその中で生まれ、展開されているといえる。

しかし、与えられた環境の中で欲求のままにただ動くだけでは、子どもたちにとって、本当の成長にはつながらない。教師が直接的・間接的なかわりを通して子どもたちを「動かす」ことにより、彼らは楽しみを見つけ、主体的に遊ぶことができるのである。

本稿で用いる「動かす」という用語は、大人が具体的な指示を与え、子どもが強制的に「動かされる」ような状況を指すものではない。子どもたち自身との交渉に加えて、子どもを取り巻く周囲の環境全体に対し大人が何らかの働きかけをし、子どもの自発的な「動き」を引き出す様子を「動かす」という言葉で示したいと考えている。つまり、教師による直接的・間接的なかわりを通じ一人一人の子どもの自発的な「動き」が引き出され、子どもたち自身によって主体的な遊びの展開が導かれるのである。

どのようなかわりや先導によって子どもたちの「動き」が引き出されているのか、さまざまな事例をあげつつ、考察を進めたい。

## 第1章 調査地の概要と調査方法

本章では調査地である「きっずこくらみなみ」(以下、「きっず」と略称する)について概要を述べる。第1節で、幼保一元化施設の特徴や制度の背景に触れ、第2節では「きっず」の成り立ちや運営理念などを示す。第3節では教員の紹介を行う。本研究では筆者も教員の一人として子どもたちとかわりながら事例を収集する、参与観察型の調査方法を用いたため、第4節ではそのことについて詳述する。

### 第1節 幼保一元化施設

現在の日本では、日本で生まれた子どもを就学まで教育(保育)する場として、保育所と幼稚園の2つがある。

保育所は、厚生労働省の管轄で、夫婦共働きで育児時間が十分に持てない親に代わり、乳幼児を保育するための施設である。幼稚園は、文部科学省の管轄で、優れた人材確保のための就学までの学校としての役割を持っている。しかし、先に述べたように、近年は保護者の就業形態、就業時間の変化などから、保育を必要とする乳幼児が増え、保育所の待機児童数が増加している。一方、幼稚園では定員割れが起り、児童獲得のため、通常の教育時間である4時間以上子どもを預かる、延長保育や休日保育を始める園が増えてきている。こうなると、保育所と幼稚園の違い

はなくなってくる。

こうした状況の下、幼稚園と保育所の機能を併せ持つ幼保一元化施設の設置が取り組まれ始めた。国では、幼稚園と保育所の機能を一元化する施設を2005年度に全国で36ヶ所のモデル事業を実施し、2006年度からの本格的な導入を目指している。しかし、元々、目的や管轄が異なるため、行政の対応は後手にまわり2005年の現時点では、そのふたつの機能を一体化することは難しいのが現状である。

### 第2節 きっずこくらみなみ

#### ○成り立ちの背景と運営理念

本研究は北九州市小倉南区にある乳幼児施設、「きっずこくらみなみ」における調査にもとづいている。「きっず」は平成16年4月1日、北九州市内では初めて開設された、幼稚園と保育所の機能を併せ持つ乳幼児教育施設である。ここでは生後6ヶ月から就学までの100名前後の子どもたちがともに生活している。

現行の制度ではたちは保護者の就業形態や、対象年齢だけで、幼稚園、保育園のどちらかに振り分けられ、通うことを余儀なくされている。働く女性の増加や、就業時間の変化などから保育所への入所希望が増え、待機児童が増加している一方、対象年齢が限られ、保育時間が短い幼稚園は定員割れをしているという状況がある。そこで、北九州で約30年間、幼児教育に携わった村端博信氏が、地域で暮らす子どもたちが同じ条件の下、教育(保育)を受けられるように開設したのが「きっず」である。現在でも、北九州市において幼保一元化施設を運営しているのは村端氏が唯一である。

村端氏は、幼稚園が運営の危機から、保育園化の手段・方法として、容易に幼保一元化を実施するのは、乳幼児の心身の望ましい発達にとって好ましいことではないと考えている。一方で、理想的な幼保一元化施設を運営するためには、現状の行政のシステムでは、幼稚園(学校法人 文部科学省所管)や保育園(社会福祉法人 厚生労働省所管)のように国・県・市からの認可を取らない認可外の施設として運営せざるを得ない。認可外施設であるため、行政からの補助金も得られないという現状にある。

そのような背景から開設された「きっず」は、【幼稚園教育要領第1章総説第1節幼稚園教育の基本】にある以下の3

点を運営理念としている。

- ・ 幼児期にふさわしい生活が行われるようにする
- ・ 遊びを通しての総合的な指導が行われるようにする
- ・ 一人一人の幼児の特性に応じた指導が行われるようにする

「きっず」の施設、教師の行動には、この運営理念が反映されている。事実、施設や教師の行動のいたるところにこの運営理念が反映されているのを感じることが出来る。

### ○ 園児数

園児数は、定員が以下のようにになっている。(2006年)

(表1)

年齢(歳)	定員(人)
生後6ヶ月から	6
1	12
2	18
3	20
4	25
5	30
合計	111

### ○ 施設

オープンスペースで、子どもたちが園庭のどこからでも入れるように設計されている(図1)。天井も高く、子どもたちの声もよく響く。夏前にはツバメの巣も天井に作られ、人間だけでなく、ツバメ達も自由に出入りしていた。満3歳から就学までの子どもたちが生活している場合は、クラスごとの教室はなく、広いホールの中でクラスごとに別れて活動している。また、自由遊びの際にはクラスに関係なく異年齢の子どもたちがかかわりあいながら遊んでいる。

園庭には、砂場、土で作られた小高い山のようなもの(築山)、花壇や畑がある。畑で採れた野菜は園児たち自身で味わう。また、総合遊具はなく、角材で作られた滑り台や、ロープで作られたブランコなど手作りの遊具であふれている。昨年には、ピオトープ(ため池)も教師達によって作られ、教師達が捕まえてきたカエルやメダカなどの生き物も飼育されている。遊具や山の裏などには、大人の目の死角になる場所もある。このようにピオトープや死角になる場所は乳幼児施設では通常、安全上タブーとされているもので

ある。しかし、このような場所は子どもの遊び、発達にとって尊重すべきものであると村端氏は語っている。

職員室にもドアの仕切りがなく、教師達の様子は子どもたちからも見えるようになっている。このように、事務作業への支障すら生じかねないこのような間取りを作った背景にも、教室の外での大人の活動を特別なものとせず、生活をまるごと大人と子どもで共有しようという意図が込められている。「きっず」では、「大人」と「子ども」の垣根は最低限に抑えられているのである。

### 第3節 教師

「きっず」では、常勤の教師が8人、パートや非常勤の教員として手伝いをしている人達が7、8人いる。常勤のうち3人が男性であり、男性ならではの子どもたちとのダイナミックな遊びがしばしばみられる。パートや非常勤の先生達は主に、0-1歳の乳児のクラスを担当している。乳児には、幼稚園機能の子どもたちとは違い、多くの見守る保育者が必要となるからである(註1)。3歳から就学までの各クラスは1人の教師が担当している。

パートの教師の中には、保育士の資格を持っていない人もいる。しかし、その人たちは自身の子育てを経験した人で、乳児を保育する際に必要となる知識は経験上習得しており、その経験は資格を超えるものがあると園の人々は考えている。

そのような人達が、教師ではなく、大人が子どもを見守るかかわり方をする中で、子どもたちには家庭的な雰囲気を与えている。また、Y先生は、飼っている小型犬を「きっず」に連れてきており、「きっず」でその犬を飼っているような状態である。このように、アットホームな雰囲気がある「きっず」では、子どもたちを迎えにきた保護者が、子どもたちを遊ばせたまま教師と話し込み、すぐには帰らないという光景もよく見られる。

また教師達の個性は「きっず」を語る上で欠かせないものであり、後に述べる「動かす」考えを示すためにも重要となる。続いて、主な教師の紹介をしていきたい。

#### ・施設長

子どもたちにヒロ先生と呼ばれる村端博信氏は、「きっず」の施設長である。彼は同じ小倉南区内にある志徳幼稚園に29年間勤務し園長も勤めた。その経験から、乳幼児教

育に関して多くのこだわりや主張がある。

彼は子どもたちが自分達で自発的に楽しみを見つけ、満足していれば、大人がかまわなくて自主的に遊び、心身を発達させていくと考えている。だからこそ子どもは大人の見えていないところで成長するといえる。その考えは、先に述べたとおり、園庭の設計にも反映されている。

施設長である彼だが、いつも職員室にこもって事務的な仕事をしているというのではなく、出来る限り子どもとかかわり、「動かす」ということを実践している。また、園庭の遊具の整備や構成なども日ごろから心がけ、環境に関しても新しいものを作り出している。

子どもたちにとっての彼の存在はどんな風であろうか。子どもが机に座っているのを見かけた彼が、「どこに座ってるんかー」と、一言声をかけるだけで子どもがすぐに座るのをやめたり、彼の大きな一声で、子どもたちが静まり返り、彼の言葉に耳を傾けるという光景がよく見られた。このようなことから、彼は子どもたちの父親のような役割を果たしていて、一目置かれた存在のようである。

#### ・副施設長

ひとみ先生と呼ばれており、ヒロ先生の妻である。彼女も志徳・志井幼稚園を30年間勤務し、そこでは、副園長も経験している。「きっず」では、特定のクラスを持たずに子どもだけではなく、教師の動きなど、「きっず」全体の様子を見ながら子どもたちに接している。来客者とコーヒーを飲みながら庭で遊ぶ園児を眺め、談笑しているという姿を良く見かける。「きっず」は地域の子育て支援センターの役割も果たしている(資料1)ため、保育に関する経験が豊富な彼女が保護者の話を聞いて子育てのアドバイスをしているのである。

子どもたちも、ひとみ先生が現れると、走って近寄り、抱きついたりしている。また、彼女も子どもたちを大事にしていると伝わるように「大好きよ」などという言葉をかけ、子どもたちを力強く抱きしめている。そのようなことの積み重ねが子どもたちに安心感を与え、安心して頼れる存在にしているようである。

#### ・R先生

にじ組の担任である。ヒロ先生の息子で2005年1月から「きっず」にやってきた。以前は高齢者施設で介護の仕事

をしていた。

子どもの身長2倍程もある紙製の筒を倒して子どもたちに受け止めさせたり、マットに子どもたちをくるんだり、男性ならではの力のいるダイナミックな遊びをしている。

筆者は、にじ組でR先生の補助をしていた。彼は、子どもたちと接することをとても楽しんでいるようだった。子どもたちの姿をそのままに受け止め、自身も子どもたちに自然体で接していた。そして、マットを片付けたり、親の迎えを待つ時間なども遊びを作り出し、どんなことも遊びにして子どもたちとともに楽しむことができる。

他のクラスの生徒から、呼び止められ、一緒に遊んでもらうことをせがまれたりすることもあった。5歳児の男の子達と、男の約束と言って、「女の子をいじめない」などのいくつかの約束をして、共通のポーズを作っていたりした。子どもたちにとって、憧れの存在でもあり、人気のある先生である。

#### ・M先生

2004年から4歳児クラスの担任をするようになった男性教師である。

大学時代には、幼児教育を専門に学び、幼稚園教諭の資格を取得している。

子どもたちと同じくらいに走り回り、遊びの際にも先頭にたって動いている。園庭では、子どもたちと一緒に裸足でかけまわっている。

ある日、M先生が庭で子どもたちと駆け回って遊んでいたところに、クラスの男の子がビニール袋に砂をいれビニールをしばったものを見せ、「いちごだ」と言った。すると、彼は「いちごなわけないやん」と言ってまた遊びのほうに戻っていった。男の子は特に気にする様子もなさそうに、いつものことのようにまた自分の遊びに戻っていった。この光景は、教師と生徒というよりは、まるで4歳児の友だち同士のような関係である。このようなことから彼は、子どもたちと同じ立場、目線で接しているような印象を受ける。

これらの教師からは、子どもたちと関わることにより自分自身が楽しんでいたりと、他の教師にはないようなかかわり方をしていることから、その教師らしい一面が見える。

#### ・筆者

「きっず」での経験によって初めて大勢の子どもたちと関

わることになった。子どもたちとは先生というよりは、一緒に遊ぶ友達という立場で接していた。保育士の資格もなく、普段あまり子どもと接することもないため、叱り方も分からないし、何が子どもにとって悪いことなのかと判断に迷い、あまり叱ることがなかった。子どもたちと外で遊んで、教室に戻ろうとする際に、私が声をかけても遊びを止めて教室に戻ろうとしないが、他の先生が少し大きな声で教室に戻ろうと伝えると、子どもたちはいやいやながらも教室に戻ることがあった。子どもたちにとって「先生」ではあるが、他の先生とは少し違う「先生」であったようである。

#### 第4節 調査方法

2004年12月から2005年11月までの週に1,2回、約60日間調査を行った。主に2歳児のにじ組のクラスの子どもたちと、保育士の補助というかたちでかかわった。にじ組のクラスに入り、R先生につきながら、子どもたちと一緒に遊び、トイレに導き排泄を促したり、給食をともにし、昼寝をするときに寝かしつけたりした。また、午前中に園外保育に出かけるときも、子どもたちと一緒に出かけ、子どもたちの安全を確認しながら見守ったりした。調査は、こうした補助の仕事のかたわら、子どもたちとかがわっている際は子どもたちや教師の動きに注目し、その日起こったことや、気になることは業務が終わってからメモをとるという方法をとった。

次の章では、調査中に気づいた子どもたちが「動く」ということや、教師が子どもたちと関わるることについて先行文献をあげる。

### 第2章 動き、動かされるとは

では、子どもたちが「動く」こと、教師が介入し「動かす」とはいったいどのようなことを指すのだろうか。本章では子どもが動くということ、子どもを動かすということについて、先行文献をもとに考察を加える。

#### 第1節 「動く」

幼児が動くことについて、『生活保育の創造』の中で片山は以下のように言っている。

幼児には絶えず動くとする生命の躍動とその生命の純粋にしてみずみずしさを看取することができる。これは人

間は本性上動くものとして創られていることに由来する。すなわち人間の本性は瞬時として同じところに留まることなく絶えず動いているのである。パスカル(Pascal, 1629—1662)が『パンセ』(Pansees, 1669—1670)において、「われわれの本性は運動のうちにある」と言明しているのも、このことを指している。こうして人間は動く存在としてあり、そのことを幼児が最もよく示していると言ってよいだろう。(片山・那須川 1998)

また、幼稚園教育要領には総説において「遊びを通しての総合的な指導が行われるようにする」という言葉が掲げられているが、「なぜ子どもは動かさなければいけないのか」ということについての理由が幼稚園教育要領の中では以下のように述べられている。

幼児期の生活のほとんどは、遊びによって占められている。この遊びの本質は、人が周囲の事物や他の人たちと思うがままに多様な仕方にかかわり合うことに夢中になり、時のたつのも忘れ、そのかかわり合いそのものを楽しむことにある。すなわち遊びは遊ぶこと自体が目的であって、人の役に立つ何かからの成果を生み出すことが目的ではない。しかし、幼児の遊びには幼児の成長や発達にとって重要な体験が多く含まれている。

遊びにおいて、幼児が周囲の環境に思うがままに多様な仕方にかかわるということは、幼児が周囲の環境にさまざまな意味を発見し、さまざまなかかわり方を発見することである。例えば、木の葉を木の葉として見るだけではなく、器として、お金として、切符と見たりする。また砂が水を含むと固形状になり、さらには液状になることを発見し、その状態の変化とともに、異なったかかわり方を発見する。これらの意味やかかわり方の発見を、幼児は思いを巡らし、想像力を発揮して行うだけでなく、自分の体を使って、また、友達と共有したり、協力したりすることによって行っていく。そしてこの発見の過程で、幼児は達成感、充実感、挫折感、葛藤などを味わい、精神的にも成長する。

このように、自発的な活動としての遊びにおいて、幼児は心身全体を動かし、さまざまな体験を通して心身の調和の取れた全体的な発達の基礎を築いていくのである。その意味で、自発的な活動としての遊びは、幼児期特有の学習なのである。

—「幼児期の遊び」幼稚園教育要領(1999)より—

上記の文章からは、子どもは遊びの中で友達や自然と触れ合うことにより、さまざまな感情を体験し成長していくのだという考えを読み取ることができる。自然に触れ合うことの出来る環境の中から、いろいろな意味を見出し、あらゆる角度から関わる事ができるのである。

しかし、その「幼児期の遊び」について、鯨岡は以下のよう

に言っている。この解説は、幼児期の遊びの本質を簡潔に、しかもかなり具体的に捉えてまとめている。(中略)しかしながら、ここには保育を展開していく上で重要な視点がいくつも含まれているにもかかわらず、もっぱら「遊ぶ子ども」を外側から見る視点から書かれていて、「遊ぶ子どもに付き合う」保育者側への言及がないために、いくつか誤解を生むものにもなっているようです。

(中略)

子どもは自主的に遊ぶのだから、保育者があれこれ介入するより、子どもにただ遊ばせておけばよいではないかという風潮が広まり、いわゆる「ほったらかしの保育」が多数見られるようになったのです。(鯨岡・鯨岡 2004)

幼稚園教育要領に書かれてある「幼児期の遊び」についての考え方に対して、遊ぶ子どもばかりに焦点が当てられていて、子どもたちとともにいるはずの教師の動きについては何も触れられてなく、いくつか誤解を生むようになっていると批判されることもある。

このように、子どもの自主性に任せすぎて、大人が介入しなくなってしまった状況がある。確かに、大人が介入しすぎると、子どもたちの欲求を見逃し、遊びを制限してしまうということが起こってしまうかもしれない。また、大人が介入することが、子どもたちの自主性を無視した、大人の都合に合わせた教育となってしまうかもしれない。

しかし、子どもがしたいようにさせておくことでは、楽しみを感じ、自己の世界を広げる主体的な遊びは導かれない。遊びの中から何かを学び得ることが困難になるのである。大人が介入し、子どもが成長していると大人とともに感じることで、子どもたちの心の成長につながっていくのである。そして、大人の働きかけにより、子どもたちが新たな発見を

し、自己の世界を広げて学んでいくことが大切なのだ。そこで、子どもの主体的な遊びを導く際に重要な大人の「動かす」という働きかけについて2節で述べる。

## 第2節 「動かす」

「動かす」ということを述べる前に、子どもが自発的に動くというのはどういうことなのかということを考えておきたい。

子どもにとって、自発的に自主性を持って遊ぶということは、自分自身で楽しみを見つけ、熱中し、遊ぶこと自体を目的にし、その他のことが遊ぶ理由となっていないことだ。そして、その自発的に遊ぶというのは、単に放置しておくところからは生まれない。子どもたちの自発的な動きを促すためには、子どもに興味を持って接し、感情に働きかけ、想像力を刺激するなどのさまざまな仕掛けや働きかけが必要である。そして、そうした仕掛けや働きかけは、大人の意図を押しつけたり、子どもの活動を制限・強要するものであってはいけぬのである。

その、子どもを「動かす」教師について、幼稚園教育要領の中では以下のように述べられている。

教師は幼児が本当にやりたいと思い、専念できる活動を見つけていくことができるように、つまり、いろいろあり得る活動の中から興味や関心のある活動を選び取っていくことができるように、しかも、その活動の中で発達にとって大切な体験が豊かに得られるように環境を構成することが必要である。

—「教師の役割」幼稚園教育要領(1999)—

そして、第1節で述べたように、子どもがしたいようにさせておくのではなく、その大人の働きかけを通して、自主的な遊びへと導いていくことをここでは「動かす」という言葉で言い表している。

「動かす」という言葉を聞くと、強制的に子どもの自主性を無視して、無理矢理動かせるということを想像するかもしれない。しかし、ここでいう「動かす」とは、教師が直接的・間接的に関わることにより、子どもたちが楽しみを見つけ、主体的に遊ぶことへと導くということである。大人が具体的な指示を与え、子どもが強制的に「動かされる」ような状況を指すものではない。子どもたち自身との交渉に加えて、子どもを取り巻く周囲の環境全体に対し大人が何らかの働きか

けをし、子どもの自発的な「動き」を引き出す様子を示そうとしている。教師による直接的・間接的なかわりを通じ一人一人の子どもの自発的な「動き」が引き出されることで、新たな動きをつくり、自己の世界を広げ、子どもたち自身による主体的な遊びへと展開していくことができるのである。

遊びを通して、子どもは人間関係や社会性を学び、体力を身につけることができる。与えられた環境の中だけでも子どもたちは自分たちで楽しみを見つけ、遊ぶことができる。しかし、それだけでは子どもたちが学べる世界が狭められてしまう。そこに、教師が働きかけ、子どもたちを「動かす」ことにより、子どもたちにとって効果的な「動き」が導き出され、遊びを豊かにしていくのである。

### 第3章 「動かす」ための仕掛け

第2章では、子どもたちがなぜ動かさなければならないのか。遊びの中で何を学ぶことができるのかということについて述べた。本章では、そのことについて、教師の働きかけにより子どもたちが動き、どのような効果があるのかということについて、具体的な事例をもとに考えていく。仕掛けの種類によって節を区切っている。

#### 第1節 自然が子どもを動かす

##### ・事例1 ため池

ある日、子ども4人と私でため池の周りで生き物を探していると、体長15センチくらいのカエルが飛び出てきた。すると、好奇心旺盛なRちゃんが何の抵抗もなくカエルを追いかけつかんだのである。私はそのとき、2歳の彼女の主体的な動きに驚きと敬意を覚えた。

また別の日には、遊びの時間の前に動物図鑑や、カエルの物語の本を読んで、おたまじゃくしがカエルになることを学び、遊びの時間にため池の周りに集まりみんなでカエルやメダカを眺める。そして、カエルを見るために、ひとみ先生が子どもたちに「カエルさーん、出ておいで」と声をかけさせたり、カエルの合唱を歌って、いろいろな方法でカエルが現れるのを試す。このように、子どもたちの空想を掻き立てる働きかけはとても重要である。

水や砂のように自分の思いによって、形が変化するものに子どもたちは想像力をかきたてられ興味を持ちやすい。また、動物や乗り物のように動くものも好きだ。つまり、「きっず」のため池には子どもたちが興味を持ちやすく、子ども

に好まれやすい対象が多く用意されているのである。また、そのような場で、その場の特徴を把握した教師からの働きかけがなされる点も見逃せない。こうした要因の重なりが、Rちゃんのようなたくましい動きやその育ちを生み出している。

また、実際に触れることのできる生き物と、絵本の中の物語での生き物、そして、歌に登場する生き物を一斉に体験することができる。現実の場と知識との組み合わせは、子どもたちの感情、成長にとってとても刺激を与える有効なものなのである。

##### ・事例2 園外保育

にじ組のR先生は、午前中のお昼ご飯までの間に、子どもたちを「きっず」のバスに乗せ、近くの公園に連れて行く。他の保育園では2歳児クラスを公園に連れて行くことはあまりないという。しかし、「きっず」ではこのようなことを積極的に行う。子どもたちはそこを「きっず公園」と呼ぶ。到着すると、遊ぶ範囲を公園内と決め、子どもたちを自由に遊ばせる。すると子どもたちは公園内にある、砂場や滑り台で遊び始める。滑り台では一人で滑れない子もいる。筆者は、全体が見渡せる高いところに登り、子どもたちの人数を確認していた。子どもたちのそばにいるR先生は、一人で滑り台を滑れない子どもに「先生が見ておいてあげるから」などと声かけをしながらその子が滑り台を滑れるように導いている。

別の日に、にじ組は0-1歳のクラスとそのクラスの教師4、5人と、ヒロ先生とで「きっず森」と呼ばれる森に「きっず」のバスに乗り出かけた。森に着くと子どもたちは、思い思いに、自分の興味のある場へと散らばっていった。木がたくさん生えているところに駆けつけていく子もいれば、どんぐりを拾い集める子もいる。0歳の子どもたちは教師と一緒に、坂や階段を上ったりしている。そんなとき、ヒロ先生は持って来たロープを森の樹に結びつけ、即興でブランコを作った。すると、子どもたちが何人か集まってきた。そして、集まってきた子どもたちを順番にブランコに乗せ、後ろで支えながら揺らし始めた。楽しそうにブランコに乗っている子もいれば、怖いと言って乗りたがらない子もいる。しかし、怖がる子にも大丈夫といって乗らせていた。

彼はブランコ遊びに対する子どもの恐怖や不安をなだめつつ、経験を通して自信を身につけさせてもいた。この

ような働きかけの積み重ねが、子どもたちの主体性を高め、多様な動きを引き出していくのである。また、その場にあった樹に、ロープでブランコを作ったことも、子どもたちの楽しみを刺激しているといえる。

この「自然が子どもを動かす」という節では、子どもたちが自然の生き物や森、公園というものと触れ合うことで、子どもたちの自発的な動きを導き出している。そして、その場で、教師が声かけをすることにより、新たな動き、遊びを引き出し、子どもたちの豊かな感性に訴えかけている。

## 第2節 異年齢

### ・事例1 A君(3歳)とBちゃん(1歳)

にじ組みのA君はお姉ちゃんと「きっず」に通っている。お姉ちゃんの友達からもかわいがられる。A君は年上の園児との交流が多いためか、自分より年下の子に対して他の同じ年の子よりも積極的にかかわろうとする。Bちゃん(1歳)を抱っこしておもちゃで遊んでいて、Bちゃんが嫌がって離れようとしても「僕、Bちゃんが好きだもん」と言って離そうとしない。私が「Bちゃん他のところで遊びたいみたいよ」と言っても離そうとしなかった。

このように、自分が兄姉からされているのと同じように、年下の子を可愛がりたいという気持ちを表現できるのも異年齢保育ならではの情景であり、そのような体験を通じて子どもたちはさまざまな気持ちを経験している。

### ・事例2 異年齢保育が年下の子に与える影響

「きっず」には兄弟で通っている子どもたちが何組かいるが、その年下の方の子どもは年上の子の友達からかわいがられる。年下の子を訪ねて年上の子たちが年下のクラスに遊びにくることもよく見られる。また、自由遊びの際にも、兄弟の年下の子の方は自分たちのクラスの子以外にも、兄や姉のクラスの子たちと一緒に遊んでいることもある。兄がいる1歳児の子を見ていると他の同じクラスの子に比べて、ボールを蹴ったり、長い棒を使ったりするのがうまい。自分の意見を主張することも他の子に比べて強くすることができる。年上の子と関わる機会が多いとその子の能力も早く上達するようだ。年上の子と関わり、年上の子の内的世界が表現された遊びを体験することで年下の子の能力も発達するのである。異年齢での交流が多い「きっず」では、年上の子とかわかることで年下の子の能力が伸びやすいという

ことになる。

また、逆に年上の子が年下の子とかわかることで、年上の子が成長している例について次に述べる。

### ・事例2 Kちゃん(2歳)と年上の男の子

にじ組のKちゃんと年上の男の子がブロックを並べてその上を歩くような道を作っていたときに、Kちゃんが並べた道を男の子がずらして曲がった道にしようとする、まだあまり言葉がはっきりしゃべれないKちゃんは「やー」と言いながら元の形に戻そうとする。男の子はまた戻そうとするがKちゃんはまた「やー」と言って戻し、何度かそのことを繰り返すうちに結局Kちゃんの道でおさまった。言葉で伝えることはできないが、態度で意思を伝えることによりKちゃんの主張は通ったのである。

ここでは、年下のKちゃんの主張が通ったのだが、年下のKちゃんと接したこの年上の男の子は、言葉をまだしゃべれない自分の意見を通そうとするKちゃんとかわかることで自分より幼く、能力の違う子の存在を知り、自分の主張を譲ったのである。このことにより、自分は我慢し、相手を尊重するというある種の社会性を身につけた。

このように、異年齢で関わることによって、自己とは違う他者の存在をお互いに知り合い、自己の存在に気づく。そして、能力を伸ばしたり、社会性、人間関係を身につけていく。最大5歳の差がある異年齢でのかかわりは、幼保一元化である「きっず」ならではのことである。このような異年齢での関わりも、子どもたちを動かすための仕掛けの一つであるといえる。

## 第3節 モノが子どもを動かす

### ・事例1 2メートルの筒

ある日の夕方、多くの子どもたちは帰宅し、数人、親の迎えを待っている子がいるときのことだ。広いホールで、R先生が2メートルほどの硬い紙でできたような筒を2人の5、6歳の子どもたちの方に倒し子どもたちに止めさせていた。そして、止める事ができると褒めていた。

子どもたちにとって、親を待つという退屈で寂しい時間を、室内にあった遊具とは呼べないような筒で遊びを作り出し、子どもたちを楽しませている。子どもたちにとって、大人と体を動かすダイナミックな遊びをすることというのは、とても充実感を感じることができる。そして、ただの筒を遊び道具にしまったR先生と遊んだ子どもたちは、つまらない時間



を充実した時間にすることができたのである。

#### ・事例2 ブランコ

事例1の遊びの後、R先生は天井にロープを吊るし、ブランコのようなものを作って子どもたちを乗せていた。地上4メートルほどもあるようなところだ。はじめは怯えた表情をしていた子どもたちも、教師よりも高い位置から下を見下ろし遊ぶことで、誇らしげな表情になっていった。

子どもたちは、自分たちだけでは届かないような高いところにロープを吊るして作られたブランコで遊ぶことが出来た。このことだけでも、遊びの幅を広げている。そして、少し身がすくむような遊びを体験することによって、達成感や充実感を覚えるのである。子どもたちの誇らしげな表情からもそのことは読み取れる。

#### ・事例3 マット

子どもたちがお昼寝をした後のマットを片付ける際に、子どもたちはおもしろがって柔らかいマットの上に寝転がり、先生が「サンドイッチ」といって、マットの中に子どもたちをくみ転がしたりする。

お昼寝をするやわらかいマットは、子どもたちにとって気持ちのよいものであるようだ。その上に寝転がり、動くというだけでも体を大きく使った楽しい遊びである。しかし、そこで教師が介入し、自分達がサンドイッチの具になったように、マットで巻かれ、転がされるというのは、精神的にも、身体的にも面白く、楽しく感じるものである。

R先生は、その片付けの時間でさえも遊びにしまい、子どもたちと時間を共有している。

これらのように、子どもだけでは体験することのできない遊びを大人が作り出すことによって、子どもたちの遊びの幅を広げることができる。また、恐怖心を抱くような危険に思えることにも挑戦させることによって、子どもたちの遊ぶ意欲を掻き立てている。そして、恐怖感を乗り越え困難なことが達成できたときや、教師から褒められることも子どもたちにとっては、自己の世界を広げることにつながる。教師が介入し、創り出した遊びで得られた感情によって、子どもたちはまた次回への自発的な遊びにつなげることができるのである。また、遊び時間ではないときに、遊び道具ではないモノで、遊びを作り出すことで、子どもたちは思わぬ楽

しい経験をすることができただろう。「周囲の環境にさまざまな意味を発見し、さまざまなかかわり方を発見する(幼稚園教育要領)」子どもたちだが、大人である教師がそのように振舞い、時間を共有することで、子どもたちの良い先導になり、刺激を与えることになるのである。

### 第4節 大人が子どもを動かす

子どもたちの動きの中に大人が介入し、直接働きかけている事例について述べる。

#### ・事例1 にじ組のA君とB君

A君が遊んでいた新幹線のおもちゃをB君が奪おうとし、取り合いになった。泣きながらR先生に助けを求めようとするA君であった。私は、そのときR先生が、子どもたちにけんかの原因を聞き、その場をなだめるかと思った。ところが、R先生は「取られたくないなら逃げろ」と言ったのだ。A君は走って逃げ回り、B君も捕まえようと追いかけるが、ついにB君はあきらめ、A君は逃げ切ることができた。

この事例では、教師が子どもに助けを求められ、子どもたちのけんかに介入しているが、教師が子どもたちの善し悪しを判断するのではなく、子どもたちにおいかけてこをさせ、けんかの決着をつけさせている。この場合での教師の介入の方法として、子どもを叱る、おもちゃを取り上げる、仲直りさせるという方法もあったかもしれない。しかし、そうすることは、大人が子どものけんかの決着をつけてしまうということになる。大人に頼らず、子どもたち自身でけんかの決着をつけるということは、子どもたちにとっても良いことである。

また、この場合、けんかをおいかけてこにすることで、けんかを忘れおいかけてこという遊びに展開させているともいえる。

けんかに大人が介入し、判断することで決着をつけさせるということは簡単なことかもしれない。しかし、子どもたち自身に結果を委ねるといふ事はとても大切なことなのである。より実感的に、社会性を身につけることができる。大人では隠しがちな怒りの感情をストレートにぶつけることや、エネルギーを消費する、避けて通りたいけんかという行為も子どもたちの発達にとって学ぶべきことが多い重要な経験なのである。

#### ・事例2 よーいどん

数日後に運動会を控えているある日のことである。徒競走のため、子どもたちは園庭のトラックを走る練習をしていた。4、5人が一列に並び、教師の「よーいどん」という掛け声のもと走り出した。そして、そのあとから、ヒロ先生が「ガアー」と大きな声を出しながら子どもたちを本気になって追いかける。捕まてはいけないぞというように、子どもたちを捕まえようと、子どもたちも先生に捕まえられないように必死に走ってゴールを目指す。本気でおびえている子どもいたが、子どもたちはただ早く走りなさいといわれるよりも、おもしろく早く走ることができているようだった。

運動会では、早く走ることが期待される。しかし、運動会の練習というのは、早く走らなければいけないことはわかっていても、何度も走らされるのは辛いことである。しかし、教師が本気で追いかけて捕まえられないように逃げるといのは、ただ早く走らなければならないと言われるよりも、本気になれるし、実際に体を動かすこともできる。

#### ・事例3 積み上げられたブロック

にじ組みのH君が、木製の車に乗って1人で車を走らせながら遊んでいた。すると、そこを通りかかったヒロ先生が、H君を引きとめ、直径20センチほどのやわらかいブロックを5つくらい車の後ろに乗せた。そして、そのブロックを落とさないようにH君に走らせたのである。H君は少し緊張したような面持ちだったが、ヒロ先生の「がんばれ」という声かけにより前に進むことができた。

H君のように子どもが、1人で自動車のおもちゃに乗り、足を動かし、駆けて遊ぶというのはよく見られるシーンである。しかし、そこに、ブロックを落とさないように進むという新しい課題が課されたことで、子どもの遊びの幅が広がったといえる。また、ここで付け加えて考えたいのは、H君は普段からおとなしい子であったということだ。普段大人しいH君はあまり大きく体を使うようなダイナミックな動きはしない。そのH君の性格を考えてのことだったのか、ヒロ先生はH君に危険なようで少し抵抗感のある遊びを仕掛けた。H君の緊張した面持ちからも、この遊びがH君にとっては抵抗のあるように思えたことがうかがえる。慎重にブロックを落とさずに進めたことによって、H君は達成感を感じ、自信をつけることができるのである。また、そのことが新たな楽しみになるのである。そして、このH君の新たな挑戦が、次回の新しい自発的な遊びを導き出すのかもしれない。

#### 第5節 物語が子どもを動かす

ここでは、空想を使った事例を挙げる前に、子どもたちが何かを真似ることで遊んでいる、ふり遊びの例を挙げておく。そして、そのふり遊びの次の段階として、空想、イメージネーションを取り入れた仕掛けに導びいている事例について後に述べる。

#### 【まね】

- ・先生が「あーあなたのお名前は？」といひながらマイクを向けて自分の名前が言いにくい子どもたちに名前を言わせる、人前で声を出させるということをまねして、にじ組のK君はマイクを持って他の子どもたちに名前を聞いて回っている。
- ・4歳くらいの女の子が絵本を自分とは反対に向け、誰かに見せるように読んでいた。しかし、周りには聞いている子もいない。その子自身も誰かに聞かせているつもりはなさそうだった。これは、先生が子どもたちに本を読み聞かせるときにすることをまねしているのだと思われる。
- ・Sちゃんは子どもたちに人気のアニメ番組、マジレンジャーのマジレッドという役になりきって、決めポーズをとっている。そこに年上の男の子がやってきて、その子も同じマジレッドになりきり、声をあげている。するとSちゃんは私がマジレッドと言ひ、年上の男の子に向かっていく。
- ・にじ組みでお昼ごはんを食べていると、A君がスプーンでB君のお皿の中のおかずをすくい、「はーい」と言ってB君の口に持って行く。するとB君は持ってこられたおかずをA君から食べさせてもらっていた。これは普段、食事が進まない子どもに先生が食べさせていることをまねしていると思われる。

このように幼児の発達段階において、友人やアニメのヒーロー、先生のまねをすることがよく見られる。そのことについて高橋は以下のように言っている。

最も初歩のふりの行為は、日常生活における自己模倣か、他者模倣の形をとる。(中略)そして、おそらく次の発達段階において、空想やファンタジーが発生する。日常生活における経験が増すことによって、蓄積されるイメージの量も増加する。(中略)このようにして、単純な現実のコピーに新たな脚色がはまこされる。(高橋 1993)

発達段階において、日常生活における経験が増すことにより、空想やファンタジーが発生し、単なるふり遊びから、あるものを何かに見立てる遊び、ごっこ遊びへと移行する。

2歳児のクラスでは、自分自身で空想を広げるというより、単純な真似であるふり遊びが多く観察された。2歳児のクラスでの、教師の働きかけによって、子どもたちの想像力が掻き立てられている例を2つ紹介する。事例1は、絵本の中の物語を、教師が子どもたちと共に空想の世界に入り共感し、世界を共有している例である。事例2では、教師が、子どもたちをごっこ遊びを用い、しつけどもいえるお昼寝に導いている例を紹介する。

#### ・事例1 お化け

『ねないこだれだ』という寝ない子どものところにお化けがやってきて、寝ないとお化けにしてしまうという内容の絵本がある。その本を、寝る前に子どもたちに読み聞かせる。その後、ダンスの中にお化けがいるという設定で、子どもたちに振舞ってみせる。まず、R先生がダンスをノックし、ダンスの中に手を入れお化けに引っ張られているようにしてみると、Rちゃんは泣いて先生のもう片方の手を引っ張り先生を助けようとする。K君は、怖がって壁にすがりついている。Aちゃんは、一緒に話を聞いていた他の先生のところ泣きついている。他の子どももまるで本当にお化けがいるかのように怖がったり、泣いたりしている。そして、ようやく先生がお化けから解放されると、子どもたちは安心したように先生に近寄っていく。すると先生は、Rちゃんに助けてくれようとしたことに対してお礼を言い、怖がっていたK君には、どうして助けてくれなかったのと話し掛ける。

子どもは、実際にはそこにはないものを本当にあると信じ感情を左右されている。筆者にも経験があるが、子どものころというのは、何かに入り込みやすい性質がある。大人になるにつれて現実の本当の世界との差が理解できてくる。子どもたちは、経験が少なく、日々新しいものの発見があり、感情でさえも真新しく経験するものである。このように子どもは現実と空想の世界を自由に行き来できている。このように、教師がお化けがいるように振舞うことで、子どもたちはお化けを想像し感情を豊かに表している。

#### ・事例2 お昼寝ボタン

絵本を読み聞かせ、昼寝の場所に向かう前にR先生は

「お昼寝ボタンを押された人は静かに自分のお布団のところまで行って自分でちゃんとお昼寝できるよね」といって背中をボタンがついているかのように指で押す。すると子どもたちは、先生に言われたとおりに静かに布団に入り一人で寝ようとしている。

普通に静かに寝なさいと言われるよりも、そこに面白い物語を与えることで子どもたちを動かしている。子どもたちにとっては、まだ遊びたい時間に寝ることは苦痛なことかもしれないが、背中にあるボタンを押されることで、ごっこ遊びのように感じ、今から寝るという状態を演じることができるのだ。

このように、物語を作り、子どもたちを空想の世界に引き込むことで、子どもたちの感情を動かし、身体的にも動かしている。この際に、教師が、子どもたちと同じ空想の世界を共有し楽しむという事で、子どもたちにとってよりリアルな世界へと感じさせることができる。

お化けの例では、教師が作り出す空想の世界を体験することで、お化けに恐怖を感じ泣いている子もいれば、果敢に向かっていこうとする子もいる。お化けとは、実際には姿が見えないものであるとされており、姿が見えないままに存在を信じ込むということは子どもたちにとって受け入れやすいことかもしれない。しかし、お昼寝ボタンのように、嘘であることがわかるような物語にも、子どもたちはその世界に入り込み楽しむことのできる優れた能力と感性をもって

## 第4章 考察

「きっず」には、子どもたちが興味を持つことができる、さまざまな環境がある。園庭のピオトープや、大人から見られない場所、手作りの遊具など、子どもの好奇心を掻き立てるものである。加えて、教師達が子どもたちだけでは作り出すことができない遊びを子どもと共に楽しみながら行っている。またアウトホームな雰囲気の中で子どもたちは安心感を持って生活することもできている。これらのことは、運営理念である、「幼児期にふさわしい生活が行われるようにする」、「遊びを通しての総合的な指導が行われるようにする」、「一人一人の幼児の特性に応じた指導が行われるようにする」ことを反映している。

幼児期にふさわしい生活とは、家庭的な雰囲気の中で子どもがのびのびと生活することである。遊びを通しての

総合的な指導とは、子どもの生活の中心である遊びから人間関係や社会性、身体能力を身につけることである。一人一人の幼児の特性に応じるとは、子ども一人一人をしっかり受け止め、その子の自主性、特性を大事にすることである。こういった環境の中で子どもたちは成長していつている。教師とのかわりとはとても重要で、その働きかけによって子どもたちは動くことができているのである。

その「動かす」ことにも、①物理的に環境を与え、子どもたちの興味のあることを引き出すこと②異年齢でのかかわりにより、多様な感情を経験すること③さまざまなモノを遊び道具、遊びに変えること④教師が子どもに直接働きかけることにより、子どもが持っている能力を引き出したり、子どもたちの社会性を身につけさせること⑤子どもたちの能力にあわせ教師が物語を創り、気持ちを共感すること、などがある。

子どもたちは、体を使った遊びを教師が作り出すことで、身体的な動きを引き出し、躍動感や達成感を感じることができている。そして、体を動かすことにより、感情も活発になってくるのである。

また、「動かす」ということの中でも、子どもの何かになりきる特性や、「空想の世界」と「現実の世界」を自由に行き来し、「空想の世界」に入り込みやすい性質を捉えた働きかけはとても効果を発揮している。お昼寝という指導の対象のものも、楽しんで取り組むことができる遊びに変え、子どもたちを導くことでスムーズに行うことができている。また、お化けがいるという物語を子どもたちとともに体験することで、想像力を働かせ精神的にも動かしているのである。

このように「動かす」というのは、教師が具体的にやるべき活動の指示を与えるのではなく、好奇心や楽しみなどの子どもたちの遊ぶ意欲に働きかける教育のことなのである。

## 第5章 結論

子どもたちにとって、動くことは欲求であり、その動きから導き出される遊びによって、自己の世界を広げることができる。また、遊びを通し他者と関わることによって、人間関係のルール、社会性を学ぶ。そのことで、嬉しさ、楽しさ、悲しさなど、さまざまな感情を体験する。そうして、子どもたちは成長していくのである。遊びとは生活の中心であり、子どもたちの遊ぶ自主性を重んじることはとても大切である。それにも関わらず、そのような子どもたちの主体的な遊び

を重んじることで、教師達が介入しなくなり、子どもたちが動きたいままにさせておくという状況が生まれてしまった。

筆者自身も、初めて、多くの子どもたちと接し、子どもたちの自由な発想や、素直な行動に触れ、この子どもたちの持っている感性、個性をそのまま伸ばしていけたらと強く感じた。そのような中、大人が子どもたちの行動を制限するのは良くないと感じたし、子どもたちを自由にさせておくべきだとも思った。しかし、自由にさせておくだけで、子どもたちは何を学ぶことができるのだろうか、好き勝手にすることが本当にその子のためにはならないのだと実感した。これからの社会を生きていくために多くのことを身につける子ども時代はとても大切である。大人がかかわり、生活をともにすることで、伝えていかなければならないこと、身につけておかなければならないことがたくさんあるのだと知った。そして、遊びの中で、多くの感情を経験し、人間関係も学んでいくことが大切な子どもたちに、遊具や、おもちゃなどの環境を与えるだけで子どもたちを遊ばせておくのでは本当の子どもたちの成長にはつながらないのだとわかった。子どもの成長には、やはり大人の介入が必要なのである。教師が間接的や直接的に関わることによって、自分達だけでは経験できないような環境、遊びを体験することができる。遊びの幅も広がり、新たな楽しみを見つけることもできる。そして、教師と遊びの世界を共有することで、自己の世界を広げることができる。

そのような、教師による子どもへの関わりや働きかけを、「きっず」では「動かす」という考えのもと、実践していた。そのような教師と子どもの密なかかわり、経験は、「きっず」ならではの、異年齢や少人数保育でこそできることでもある。そして、施設長がいうように、大人たちが「動かす」ことにより、体を動かし、充実感を持って遊ぶことが出来る子どもたちは、子どもたち同士でも新たな関係を作り、大人の見えない死角でも自分たちで積極的に遊びを作り出すことができるのである。遊びの中でさまざまなことを学ぶことができる幼児期にとって、誰にも邪魔をされずに、自分の感情のもと、主体的に遊ぶことができるということはとても大切なことである。

このように、子どもたちにとって、遊ぶことはとても大切であるが、大人が、強制的ではなく、働きかけ「動かす」ことによって、子どもたちの遊びはより主体的な充実したものになっていくのである。

<参考資料>

註1:

保育所では、1人の教員が受け持つことのできる子どもの人数(保育士の配置基準)が以下のように定められている。(最新保育資料集)

(表)

年齢	大人1人に対する子どもの人数
0歳児	3人以下
1-2歳児	6人以下
3歳児	20人以下
4-5歳児	30人以下

きっずこくらみなみ

平成16年4月1日、福岡県北九州市ではじめて開設された、幼稚園と保育園の機能を持つ乳幼児教育施設(生後6ヶ月から就学まで)である。

運営理念

- ・「幼児期にふさわしい生活が行われるようにする」
- ・「遊びを通しての総合的な指導が行われるようにする」
- ・「一人一人の幼児の特性に応じた指導が行われるようにする」(幼稚園教育要領 第1章総説 第1節 幼稚園教育の基本)

事業計画

柔軟で多様な教育サービスを目指します

長時間保育・一時預かり・送迎バスの運行・完全給食が保障できる運営体制と、地域の子育て支援センターの役割を果たします。

教育(保育)内容・方法は、生後6ヶ月から2歳は保育所保育指針、3歳から就学までは幼稚園教育要領に基づいて、教育(保育)計画・指導を作成して運営します。

様々なライフスタイルに対応します

乳幼児を教育(保育)する時間は、午前7時から午後7時までの12時間です。

乳幼児を養育する保護者は、専業主婦・夫婦共働きなどの家庭の事情から、幼稚園の機能を持つ基本的な教育時間の4時間、もしくは保育所の機能を持つ長時間保育(7:00～19:00)などを選択することができます。

教育(保育)期日は、幼稚園運営に基づきますが、長期休

業(春・夏・冬休み)・土曜日については、保育所の機能(長時間保育)を実施して、保護者の要請に対応します。

子どもの発育を大切に施設設計

「きっずこくらみなみ」の施設は乳幼児の心身の発達の特性を考えて、0歳～2歳まで乳幼児の施設(保育所の機能)と、3歳～就学までの幼児の施設(幼稚園の機能)とは分けて教育(保育)します。

施設は木造建築で、コンクリート建築にはない木のぬくもりが感じられる外観と、シックハウス症候群などの心配がない、子どもの体に優しい空間を整えています。

—きっずこくらみなみ パンフレットより—

参考文献

- ・片山忠次・名須川知子 1998『生活保育の創造』
- ・鯨岡峻 鯨岡和子 2004『よくわかる保育心理学』
- ・高橋たまき 1993『子どものふり遊びの世界【現実世界と想像世界の発達】』
- ・森上史朗 2000『最新保育資料集』
- ・文部科学省 1999『幼稚園教育要領解説』

謝辞

本論文を書くにあたり、多くの方々にお世話になり、多大な迷惑もおかけしたと思います。調査の場を提供してくれ、惜しみない協力をしてくださり、多くの実のある話を聞かせてくださった、きっずこくらみなみの村端博信先生は、幼児教育に関してあまり知識のない私に熱心に現場での事を教えてくださり、参考になる資料もたくさん貸して下さいました。「きっず」の先生でもあるウイラポン氏には、本稿を制作するにあたり、多くの提案、助言をしてもらいました。「きっず」の協力なしでは、本論文を書き終えることができませんでした。また、指導教育である竹川大介先生をはじめ、竹川ゼミの皆さんにも貴重な時間を割いてもらい、多くの助言と力をいただきました。この場を借りて感謝の気持ちを申し上げます。本当にありがとうございました。



(図1)きつぞくらみなみ見取り図 HPより